

4-1-12 臨床検査部

臨床検査部は、病理検査室、高度先進検査室、生理検査室、細菌検査室、輸血検査室、中央採血室、および院内ブランチラボで構成されている。部長は16年7月より田中敏章(前内分泌代謝科医長)が勤め、病理検査室長は17年4月に中川温子室長が着任した。輸血検査室長は恒松由紀子小児腫瘍科医長、高度先進検査室長は奥山虎之遺伝診療科医長、生理検査室長は岡 明神経科医長が併任している。病理検査室の松岡健太郎医員が、平成18年1月～3月にサンチャゴ大学病院に留学し、胎盤の病理の研鑽を積んできた。

18年4月に小泉良一臨床検査技師長が、NHO 相模原病院に転出となり、後任としてNHO 埼玉病院の上原信夫臨床検査技師長が転任となった。同期に主任臨床検査技師の山本優美子がNHO 東京医療センター、山口秀樹が国立国際医療センター、服部利郎がNHO 松本病院へ転出となり、後任には主任臨床検査技師の小坂諭(NHO 東京医療センター)、河本健二(NHO 神奈川病院)、本間綾子(NHO 災害医療センター)を迎えた。10月に内豊臨床検査技師がNHO 相模原病院に主任臨床検査技師として転出となり、後任に外川靖士臨床検査技師が採用となった。また、19年1月には中村宏紀主任臨床検査技師がNHO 東長野病院へ転出となり、後任としてNHO 西新潟中央病院の山田稔主任臨床検査技師が転任となった。従って臨床検査部は、18年4月現在、医師3名(併任除く)、技師長1名、副技師長1名、主任技師5名、技師7名、行二職員1名、非常勤職員10名で、そのほかに院内ブランチラボにSRLより21名派遣されている。

臨床検査部における経営改善の一環として、保険未収載検査の乱用を避けるために16年度から立ち上げた保険未収載検査審査委員会の活動によって、削減する方向で進んでいる。また、院内ラボにおける緊急性の低い検査の院外化の検討を行を続けている。この作業は、独立行政法人化をみずえてさらに進める必要がある。

また、臨床検査部ではおもに臨床検査技師の学術的・技術的をめざして、平成18年より臨床検査部の勉強会を3月より開始し、以下の計7回の勉強会を行った。以下がその概略である。

- 平成18年6月 中村主任技師 「神経芽腫における免疫細胞化学的検査」
- 平成18年7月 松岡病理検査医員 「胎盤の病理診断」
- 平成18年9月 大喜多(研究所 発生分化)「血管腫の一例」
松岡病理検査医員 「新生児期肝疾患における肝内リンパ管の組織学的検討」
中川病理検査室長 「腎移植後リンパ増殖性疾患の2例」
- 平成18年12月 中村主任技師 「HPV typing の有用性について」
- 平成19年1月 上原臨床検査技師長 「原価管理改善と習得技術を示すスキルマップの役割について」
- 平成19年2月 湊川技師 「胎児超音波スクリーニングについて」
- 平成19年3月 上原臨床検査技師長 「医療変革期に対応する臨床検査技師の在り方」

院内ブランチラボを除いた臨床検査部の検査件数は、平成17年度は132,929件(保険点数28,124,989点)にたいし、平成18年度は144,902件(保険点数33,558,247点)ある。平成18年度には小児医療施設には追い風となる診療報酬改定が行われたこともあり、点数では5,433,258点と大幅な増収をみた。検査件数に関しては、とくに細菌検査と生理検査の伸びが著しい。今後も、この傾向は続くものと思われる。